

グローバル化する社会への対応 (第25回)

海外で学ぶということ： SAプログラムの実践を通して

関西大学 外国語学部・大学院外国語教育学研究科 教授(学部長・研究科長)

たけうち おさむ
竹内 理



博士(学校教育学)。専門分野は英語教育学。文部科学省、兵庫県、大阪府、京都府等で教育関係の各種委員を務める。主要著作に『達人の英語学習法：データが語る効果的な外国語学習法とは』(草思社、2007)、*Researching language teaching and learning* (共編著：Peter Lang, 2009)、『外国語教育研究ハンドブック』(共編著、松柏社、2014)、*L2 selves and motivations in Asian contexts* (分担執筆：Multilingual Matters、印刷中) などがある。

筆者が勤務している学部では、グローバル化する社会へ対応するため、Study Abroad (SA) プログラム、つまり海外で1年間学ぶプログラムを必修科目として導入している。毎年、2年生の学生全員(約170名)がこのプログラムに参加しているが、2010年のプログラム開始以来、はや6年の年月が経過した。この間、さまざまな経験を通して筆者が感じたことを、ここに少し書き留めて、みなさんと共有してみたい。

SAプログラム

このプログラムでは、7カ国1地域13大学(英国、米国、豪州、NZ、フィリピン、中国、台湾、韓国)へ学生を送り出している。^(註) その目的としては、(1)外国語運用能力の向上、(2)専門課程科目への準備、(3)異文化の直接体験、そして(4)「生きる力」の育成などがあげられる。

(1)については、SAプログラムへの参加に向けて、入学とともに(推薦合格者の場合は入学前から)開始される。少人数のクラスで、4技能を徹底的に鍛えられた後、英語専攻の場合はTOEFLスコアで(中国語専攻の場合は中国語検定と面接で)、プログラムへの参加の可否が決められる。基準点をクリアできない者は、残念ながらそのまま残留が決まるというシステムのため、目の色を変えて勉学に励むことになる。留学中も、前半は外国語能力の向上に時間が費やされる。ここでつまずくと、SAプログラム後半の専門課程科目の受講や、インターンシップへの参加が難しくなるため、これまでに経験が無いほど、外国語の学びに時間とエネルギーを費やすことになる。

ここも無事にクリアすると、(2)の目的に

とりかかる。学生たちは、帰国後の3年生と4年生で、専門プログラム(言語コミュニケーション教育、言語分析、地域文化、異文化コミュニケーション、通訳翻訳の5つから選択)を学ぶことになるが、クラスの使用言語が英語(あるいは中国語)のみのイマージョン科目も多いため、その下準備として、必要な入門科目を、2年生のうちに留学先の大学で学んでくることとなる。

留学先の大学は現地でも(そして世界的にみても)レベルの高いところばかりで、また正規の大学生とともに科目を受講することになるため、日本人の大学生(2年生)にとっては、四苦八苦の連続となる。

この(1)と(2)を進めながら、学生たちは、異文化の直接体験も持つことになる。寮あるいはホームステイ先でさまざまな人物と交流を持つだけでなく、休みには各地を旅行したり、ボランティア活動に参加したり、クラブ活動に参加したり(過去に現地の大学生からクラブの部長に推薦された学生もいる)、様々なインターンシップに参加したりと、内容の濃い経験をすることになる。

しかし、このプログラムで一番大切なのは、なんといっても(4)の「生きる力」の育成であろう。学部としては、留学前指導の授業や説明会をいくつも提供し、先輩たちとの情報交換会の場も設定し、さらにはSA支援センターを設置して学生達の留学を支援している。しかしその一方で、細部については、学生自身が調べ、自分で考え、判断し、その行動の結果を自己責任で受け入れるという原則も徹底している。留学中もこの原則は変わらない。留学先で問題に直面した場合は、まず自分の頭で考え、判断し、そして必要な行動をとることになる。つまり、自力で問題を解

決する「生きる力」の育成を、何よりも大切に
するプログラムといえよう。プログラム開始
当初は（そして時に今でも）どこまで「手
をさしのべる」べきか、悩むところも多か
ったが、現在のコンセンサスは「目を離すな
、手を離せ」で、この原則を関係者（いわゆる
stakeholders）の全員が共有をするよう努力
をしている。

何が変わるのか

それでは、このSAプログラムを通して、学
生たちの何が変わっていくのであろうか。外
国語運用能力や異文化適応能力の向上につ
いては、すでに様々な研究がなされ、その成
果が報告されているのでここでは割愛するが、
比較的見過ごされがちな上記以外の能力、さ
らには態度や考え方の変容について、筆者の
気づいたことをいくつか書き留めてみたい。

【自律性】

帰国後に、保護者・関係者の方から大学宛
てに感謝の手紙を頂くことがある。その中
には、「自分で考えて行動する力が身につ
き、見違えるほど逞しくなった」、「自
分の足で歩み始めた感じがする」、「自
力で問題を解決する姿勢が育った」とい
うように、自律性に関わる変容に関して書
かれていることが多い。

SAプログラムの過程を通して、さまざま
な決断を迫られ、その結果責任を問われて
きただけに、自分で「思考」・「判断」・
「表現（行動）」する力が、ある程度育成
されたものと考えられる。このような自律
性の向上は数値でも示すことができるが、
関係者の目からみると、数値の提示を待
たなくとも、その差は一目瞭然なのであ
ろう。

【コミュニケーションに対する態度】

コミュニケーションに対する態度にも、
変化が感じられることが多い。さまざま
な距離感を持つ大人との（しかも異文化
の中での）コミュニケーションを経験し、
どう話しかければ自分の目的が叶えられ
るのか、何を伝えれば過不足ないのか、
感情的にならずに不満を伝えるにはどう
したらよいか、などを考

える経験を積んだ結果の変化と考えられ
る。激しく、そして時にトゲのある言葉
でしか要求を伝えられなかった学生が、
たとえそれが叶えられない場合でも、次
につながるコミュニケーションができるよ
うに変貌している事例を見ると、SAプ
ログラムの成果を感じずにはいられない。

【計画の立て方】

計画（段取り）の立て方に、顕著な変化
を示す学生も多い。SAプログラムでは、
計画的に目的を遂行することを強く求め
ており、段取りをする力、つまりメタ認
知能力の活用が不可欠である。メタ認
知の能力は、訓練次第で伸びることが
さまざまな文献で示されているが、帰
国後の種々のプロジェクトの進め方を見
ていると、特に進捗状況のモニターとフ
ィードバックの利用（および提供）の面
で、SAプログラムの影響が感じられる。
つまり、自分自身で計画をモニターし
ていくだけでなく、他者の目をうまく利
用し、その意見を取り入れて改善を図る
ことに目覚めたようである。

さらに、他者に対してフィードバックを
与えることにも積極的になる傾向が認め
られる。これらに加えて、チャレンジに
対するハードルも低くなるようで、目標
設定に関しても、少し高めの設定をする
傾向がみられる（ただし、時にこれは仇
となり、過度な「自己効力感」となる場
合もあるが）。

【協働に対する態度】

加えて、協働に対する態度に大きな変
化を示す者がいる。協働とは「異なるも
のをむやみに拒絶せず、リスペクトを
もって受け止めて共存させ、対話を通
して、そこから新しいものを生み出す」
ことをさす。留学先では、様々なバック
グラウンドを持つ学生とともに協働の活
動を行い、時に失敗し、経験を積んだこ
とで、「相手を受け止め、対話で課題を解
決する」という方法に理解が深まり、態
度の変容が生じたものと考えられる。

留学前にみられた「どのように協働して
いけば良いのか分からない」、「（自分
の努力に）

ただ乗りされるのがいやだ」,「協働の結果で成績を付けられるのは困る」というようなネガティブな考え方は, SAプログラムを経て, 改善に向かうケースも多いようだ。

【思い込みの修正】

最後に, SAプログラムで培った批判的な思考(つまり「物事について多面的・複眼的に眺め, その価値判断を, 証拠に基づき論理的に積み重ねて構築していく」こと)に帰因すると思われる変化についても述べてみたい。具体的には, 「ことば」や「ことばの学習」への思い込み(あるいは信念: belief)に関する変化である。たとえば, 英語一辺倒であった学生が, 英語以外の言語を学ぶ必要性を認識しはじめたり, 発音の良さこそ外国語能力であると考えていた学生が, その過度なこだわりを改めたり, ことばは単なるツールだと考えていた学生が, 言語文化の重層性を認識したりと, その態度を修正していく。この修正には, 単に知識を提供するだけでなく, SAプログラムのように, 直接体験ができる場面や文脈もあわせて提供することが, 大いに役立つようである。

おわりに

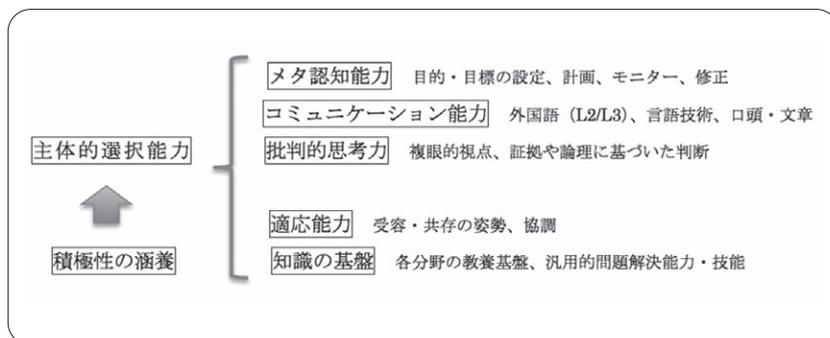
筆者は, 以前, 本誌上で, 「グローバル人材」の定義をこころみた(竹内, 2014)。その中で, グローバル人材は, 「メタ認知能力」, 「コミュニケーション能力」, 「批判的な思考力」, 「適応能力」, 「知識の基盤」などを駆使して, 主体的に問題解決を図る能力もつ人材であると定義した(図1参照)。

この定義に従って考えると, 6年間にわたり実施してきたSAプログラムは, グローバル人材の根幹をなす能力や態度の多くに, 先述したような変化を引き起こす可能性を持っていることになる。もちろん, すべての留学プログラムがこのような成果を引き起こし得るわけではない。また, 確かに中等教育段階で, 大学のような1年間にもわたる留学プログラムを広く実施するのは難しいかもしれない。しかし, ここで得られた知見は, 海外留学の利点が, 外国語運用能力の向上のみに限定されず, 様々な変化を引き起こす可能性を秘めたものであることを示唆しており, 中等教育の現場にも興味深いものであると考えられる。今後, さらに経験を積み重ね, 中等教育の向上にもSAプログラムの成果が少しでも役立つよう, そのエッセンスをうまく共有していきたいものである。

(注) この中には, 英語主専攻の学生を対象として, 英語と現地の言葉を同時に学ぶ「クロス留学」(dual language SA program)の実施校も含まれている。具体的には, 台湾(国立成功大学)と韓国(韓国外国語大学)で, 前者では英語と中国語, 後者では英語と朝鮮語という2カ国語の運用能力向上をめざすことになる。なお, 2017年4月より, キルギス共和国(中央アジア・アメリカ大学)において, 英語とロシア語のクロス留学プログラムも実施される予定である。

参考文献

竹内 理 (2014). 「グローバル人材」とは何か - 主体的選択能力の育成に向けて『兵庫教育』8月号 (No.762), 4-7.



▲ 図1. グローバル人材が有すべき能力・態度 (竹内, 2014改編)